

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第6号 畑作物

発行日 平成25年 8月29日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ **大豆** 平年並から平年よりやや早い開花となりました。7月の長雨による影響から湿害や茎疫病の被害が見られるほ場があり、生育量は全般に平年並みから平年をやや下回っています。
マメシンクイガの防除適期は8月下旬から9月上旬です。薬剤が莢によく付くように散布しましょう。
- ◆ **小麦** いよいよ26年産小麦栽培が始まります。播種適期を逃さないよう作業計画を立て、排水対策を必ず実施しましょう。
播種は土壌条件が整ってから行い、出芽・初期生育を確保しましょう。

大豆

1 生育概況

開花期は、県北部では平年並み、県南部では平年よりやや早まりました。7月の長雨による影響から湿害や茎疫病の被害が各地域で散見されました。8月に入り生育は回復してきておりますが、生育量は全般に平年並みから平年をやや下回っています。

2 病害虫の防除

マメシンクイガの防除適期は、県中北部で8月第6半旬、県南平坦部で9月第1半旬です。ただし、ピレスロイド系薬剤を使用する場合は、上記より1半旬早め(県中北部で8月第5半旬、県南平坦部で8月第6半旬)に散布すると、より高い防除効果が得られます。

紫斑病の防除適期は、若莢期(開花後20日頃)～子実肥大期(開花後40日頃)となります。

いずれも薬剤が莢によく付くように散布(生育が旺盛な場合は登録の範囲内で散布水量を増やす)しましょう。

3 手取り除草の実施

雑草は収穫時に汚損粒の原因となります。また、次作の発生源となりますので、大型雑草がある場合は種子をつける前に除草を行いましょう。

4 台風対策

台風の影響を受けやすい時期になります。土壌表面の排水を促進するため周囲溝や排水口などを点検・補修し、土壌表面水を速やかに排水できるようにしておきましょう。

小麦

1 排水対策

水稲の刈り取り作業と小麦の播種作業が競合することにより播種適期を逃してしまうことが心配されます。排水対策を早めに実施し、ほ場を乾かしておきましょう。

水稻の刈り取り後、小麦を作付けするほ場については、地表水の速やかな排水を促すため、できるだけ早く額縁明渠を設置しましょう。→必ず排水路につなげて下さい（水尻は大きく掘り下げ、フリードレン下部から排水するようにしてください）。

ほ場内明渠は、播種後に実施することも可能です。十分な準備ができない場合、播種後の施工も想定しておきましょう。

2 プラウ耕

水田ではロータリ耕が一般的ですが、小麦栽培では深耕のためにプラウ耕が必要になることもあります。ただし、深耕が難しい場合もありますので、あらかじめ作土や耕盤の深さなどを調査し、不良な重粘土ややせた下層土が作土に混入することを避けるなど、十分に検討してください。

表1 プラウ耕とロータリ耕の利点と欠点

	プラウ耕	ロータリ耕
利点	<ul style="list-style-type: none"> ・深耕、砕土による透排水の改善 ・有効土層確保（15cm以上） ・わら等のすき込みが容易 ・雑草の種子や塊茎の低減 	<ul style="list-style-type: none"> ・砕土、整地を兼ねた省力作業 ・小型トラクタで対応可能
欠点	<ul style="list-style-type: none"> ・20ps程度のトラクタでは対応が難 ・耕起後の整地作業が必要 ・一気に深耕すると肥培管理が難 	<ul style="list-style-type: none"> ・耕深が10～12cm程度と浅い ・耕盤ができ、排水不良、土壤構造が緻密化 ・湿田では土を練ってしまう ・有機物のすき込みがしにくい

3 砕土・整地

深耕を行った場合は、大きな土塊を砕くため、砕土・整地作業を十分に行う必要があります。土塊が多いと播種精度が落ち、発芽が劣るなどの問題が生ずるので、水稻から転換後1～2年は砕土・整地をできるだけ丁寧に行いましょう。

特に砕土の良否は発芽に大きな影響を及ぼすため、一般的に地表部10cm層の砕土率（粒径2cm以下の土塊の割合）を70%以上にする必要があるとされています。砕土作業は、ハロー耕（ツースハロー、ドライブハロー、バーチカルハロー）やロータリ耕が効率よく行えますが、作業時の土壤水分によっては砕土性が劣る場合があります。砕土作業はプラウ耕の方向に対して直角か45°の角度で行い、砕土後はほ場を均平にするため整地します。ロータリ耕のあとは土壤が水分を含みやすく、降雨があると乾きにくくなるため、播種直前に行うようにしましょう。

また、アップカットロータリを用いると、表層の砕土率が高く、下層は粗い二層構造の土壤を形成し、有機物の埋め込み性にも優れ、その後の播種作業も楽に行うことができます。

表2 水田転換畑（初年度）と普通畑における砕土率と発芽率（昭和42年；東北農試）

水田転換畑		普通畑		備 考
砕土率 （%）	発芽率 （%）	砕土率 （%）	発芽率 （%）	
64	77	77	83	<ul style="list-style-type: none"> ・土壤型：多湿黒ボク土 ・耕起、砕土：プラウ耕、ロータリ耕 ・品目：とうもろこし ・播種法：コーンプランター播種
61	72	74	84	
57	70	71	86	
49	67	66	84	
45	68	57	78	

4 適期播種と播種量、播種方法

播種期が遅くなると、年内に確保できる茎数が少なく、穂数不足による減収や、根張りが少ない

ため凍上害にあうことが多くなります。特に、県北部では播種晩限をすぎるほど減収程度が大きくなるので、適期播種に努めましょう。

品種別の播種量と目標株立数を参考に、播種が遅れた場合には播種晩限から 1 週間遅れるごとに播種量を 1 割ずつ増やしましょう。また、やむをえず萎縮病類が発生したほ場に今年もナンブコムギを作付ける場合には、播種量は標準の 3 割増とし、100～120 株/㎡の株立数を目指しましょう。

ドリルシーダーを用いてドリル播き（密条播）する場合は、播種量の調整を行い、施肥機がセットされている機械では播種同時施肥を行います。また、播種深度は 3～5cm 程度を目標とします。播種深度が深すぎると、出芽のバラツキや出芽率が低下します。逆に播種深度が浅すぎると、凍上害や鳥害、除草剤の薬害などが生じやすくなるので注意しましょう。

ブロードキャストで種子を散播する場合は均一散播に心がけ、覆土はパディハローやロータリなどを用いて浅く（5cm 深程度）攪拌、覆土を行います。

表 3 県内の地帯別播種適期

地 帯	播種期（月．日）		適期日数 （日間）
	早限	晩限	
高標高地	9.15	9.25	11
県北部	9.15	9.30	16
県中部及び沿岸北部	9.20	10.5	16
県南部	9.25	10.20	26

表 4 品種別の播種量と目標株立数

品 種 名	播種量 (kg/10a)		目標株立数 (株/㎡)	千粒重 (g)
	ドリル播	全面全層播		
ナンブコムギ	6 程度	8 程度	75～120	41
ネバリゴシ	6～8	8～10	130～170	37
ゆきちから	6～8	8～10	120～160	39
ファイバースノウ (大麦)	6～8	8～10	130～170	38

注) 播種粒数に対して株立率を 80%（全面全層播は 64%）として求めた。

●萎縮病対策

岩手県内全域で萎縮病類に汚染されているほ場が目立ちます。抵抗性の高い品種（ゆきちから等）の導入が有効です。ナンブコムギを作付けする場合は、発病ほ場では安定した収量確保が難しいので、ほ場の変更を検討しましょう

萎縮病類は土壤伝染するので、農業機械、農機具および作業者の靴の土壤をよく洗い、汚染土壤を他のほ場に持ち込まないようにしましょう。また、やむをえず作付けする場合、「播種晩限」より遅れない範囲で播種期を遅らせることで、早期感染を防ぎ被害の軽減につながります。

萎縮病対策には冬期播種も有効ですが、排水条件が良く雪解けの早い地域でないと生育量が確保できないことがあります。実施にあたっては十分注意してください。

5 除草剤処理

除草剤をよく効かせるためには、

- ・ 散布のタイミングを逃さないこと。
- ・ 砕土・整地を丁寧に行うこと。
- ・ 土質によって薬量が変わる場合があるので、ラベルをよく読むこと。

が重要です。

過湿条件では薬害が発生する危険があるので散布を避けましょう。また、輪作や周囲の草刈りなど耕種的な防除を併せて実施し、総合的な雑草防除を行いましょう。

前年にイタリアンライグラスが多発した圃場では、耕起前（イタリアンライグラス出芽後）に非選択性茎葉処理剤を散布し、その後耕起・播種する方法が有効です。

次号は9月26日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター・県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。